Abraham Cahan, *The Rise of David Levinsky* 論 —社会進化論的視点から

大工原　ちなみ

従来，Abraham Cahan（1860-1951）の代表作である *The Rise of David Levinsky*（1917）は，アメリカ文学においては，ユダヤ系文学の黎明期の作品としてのみ評価されることが多く，賞賛されたとしても，「1930年代以前にアメリカのユダヤ人によって書かれたものの中で最も優れた作品」[1] と限定がついた。この論文では，この作品を正当に評価するためにもまずは，当時のアメリカ文学の流れの中にこの作品を置いてみて，再照射を試みたいと思う。[2]

この作品が書かれた20世紀初頭という時期を，アメリカ文学史の流れの中において見ると，19世紀後半の1880年代中頃には，アメリカ・ルネッサンスというロマン主義の時代が終りを告げ，それに代わってアメリカ・リアリズムの時代が訪れ，小説はロマンティックなものから，場合によっては政治手段として力を持つものへと変化し始める。

このリアリズム文学の発展に大きく貢献したのは，William Dean Howells（1837-1920）である。彼は，Mark Twain を助け，Stephan Crane や Frank Norris のみならず，この Abraham Cahan を世に送り出している作家である。Howells と Cahan は，1892年に出会っており，彼の代表作である *The Rise of David Levinsky*，が，Howells の *The Rise of Silas Rapham*（1885）のタイトルを模したものであることは良く知られており，彼から受けた影響の深さを知ることが出来る。Howells はまた，いわゆる「お上品な伝統」にも別れを告げ，作品の中で当時はタブー視された離婚を一つのテーマとして扱い，一般大衆に衝撃を与えている。Cahan も小説の中で不倫を扱っていることから，この点でも Howells 流の伝統破りが継承されていると言えよう。

更に世紀の変わり目に近づいていくと，進化論を唱えたダーウィンやそれまでの西洋的思想の中心にあったキリスト教を否定したニーチェの超人思想，更には社会主義に強い影響を受けた作家たちが現れる。Jack London（1876-1916）は，代表作である，*Call of the Wild*（1903）にみられるように犬などの動物を主人公にすることが多かったが，人間を模した彼らが自然の中でたくましく生き残っていく（あるいは死んでいく）様を通して，ダーウィンの説く「適者生存」や「生存競争」の原理を示し，自然の法則が実はいかに人間を支配しているか描いている。

次にやってくるのが，Muckrakers の時代（1900-1914）である。政治は腐敗し，資本主義には矛盾が噴出し，経済的な弊害に労働者たちは苦しめられていた。その状況を救うべく出現した「暴露作家達」は，政治家や企業の不正を自分たちの小説の中で暴き立てることを使命と

考えたのである。彼らの代表であるUpton Sinclair（1876-1968）は，*The Jungle*（1906）を書き，移民の家族の物語を通して，シカゴの食肉工場で働く労働者がいかに悲惨な生活を送っており，食品を扱いながら工場がどれほど不衛生な状態であるか暴露してみせる。この描写を読んだアメリカ人たちはショックを受け，時のルーズベルト大統領が，早急に食品業界の改革に乗り出さなければならなかったほどである。この流れは，社会主義思想というバックグラウンドを得て，Socialismの作家たちを生み出していく。

この後に偉大な自然主義作家と冠されるTheodore Dreiser（1871-1945）がやってくる。彼は，*Sister Carrie*（1900）で新しいヒロイン像を描いてみせる。それは従来のお上品な伝統の中では想像すら出来なかった女性である。彼女は，金や社会的地位に対する欲望を隠そうとすらしない。目的を成就するためならば，次々と男性と関係を持ち，相手が富も地位も失い転落すればまた別の男性に乗り換えていく強かさを持っている。その結果，彼女は美貌の助けもあって女優として成功する。だが心は満たされず真に幸福にはなれない。この作品は約20年前にHowellsの作品が，genteel traditionを重んじる社会に受け入れられなかったのと同じ，淫らな男女関係という「下品」なテーマを扱っているという理由で，1912年まで世間に受け入れられることはなかった。この小説では，彼女が次々とsocial ladderを登りつめていくが，それは小さな偶然が重なって可能になっている。逆に，相手の男性の失墜も偶然が重なり合った結果起こったことである。偶然に支配される人間像に自然主義的な特徴がよく現れている。

また19世紀後半中頃には，地方主義作家たちも登場しアメリカの広い国土の多様性をそれぞれに描き出す。ニューイングランドでは，Sarah Orne Jewett（1849-1909）が過酷な自然の中で孤独に生きる人間を描き，南部では，Thomas Page（1853-1922）らが，黒人奴隷の言葉を生かしつつ，奴隷の惨めな状態を描き人種問題を扱っている。またKate Chopin（1851-1904）は，女性の自立をテーマにした*The Awakening*（1899）で姦通を扱っている。中・西部では，地方主義文学の父といわれるBret Harte（1836-1902）が短編の中で，西部の鉱山町の人情深い人々の風俗を描いている。このように地方主義文学では，方言を生かしながらその風土で生きる人々の様子を生き生きと描いているが，やはり自然主義の影響を多かれ少なかれ受けている。

ここで改めて，Abraham Cahanの*The Rise of David Levinsky*が書かれた1917年という時代について考えてみるなら，文学的には，19世紀のロマン主義の時代は終り，リアリズムや自然主義が全盛を迎えようとしており，ダーウィンの進化論がもてはやされている。Cahanの作品でも主人公David Levinskyは，衣料関係の業者として成功を収めるが，自らの成功を進化論に当てはめ，自分は生存競争を勝ち抜いた適者であるとしている。また，ようやく「お上品な伝統」から脱却し始め，自由な恋愛や男女のあり方をリアルに小説の中で書くことが可能となってくるが，この作品でもDavidと友人妻との不倫が長々と綴られている。

一方で地方主義文学も盛んであるが，Cahan もニューヨークという都会ではあるが，その一地区である Lower Eastside のユダヤ人街といういわば地方を舞台とし，移民たちの暮らしをありのままの形で具に小説に描いており，また，地方主義作家たちが作品中に方言を多用したのと同様に，小説の中にイディッシュ語やイディッシュ訛りの英語を多用している。しかもそれまでイディッシュ語による執筆活動を行ってきた彼が，代表的な小説となった，*Yekl, A Tale of New York Ghetto*（1896）や *The Rise of David Levinsky* はいずれも英語で書いている。これはイディッシュ語の雑誌が読者として新移民のユダヤ人を想定していたのに対して，小説の読者としては，非ユダヤ人も含めて想定していたためであろう。地方主義文学の読者が，作品を読むことで未知の地である地方に思いを寄せたのと同様に，非ユダヤ人にとって，Abraham Cahan の描くニューヨーク・ゲットーの話は，未知の世界を覗いてみたいという彼らの欲求を満たすものであった。無論それと同時にユダヤ人ゲットーのことを紹介することで，非ユダヤ人にゲットーの住人についての理解を深めてもらおうという Cahan 自身の意図もあったことだろう。

また，資本主義の歪から貧しい労働者たちが多量に生まれ，彼らの間で，社会主義がもてはやされ，社会主義文学も興隆していくが，この作品の中でも，主人公 David は作者である Cahan 同様に，当初社会主義に傾倒する。その後資本家として社会主義への反発を強めていくとはいえ，作品の中にはストライキや社会主義者たちへの言及が随所に見られ，社会主義文学的要素もみられる。

以上のように，この *The Rise of David Levinsky* は単にユダヤ系移民の素朴な移民文学というよりも，20世紀初頭のアメリカ文学の様々な要素を反映している作品と言えよう。この小論では，その中でもこの作品を強く特徴付ける社会進化論と社会主義を取り上げて考察したいと思う。この二つは，ロシアではユダヤ教を深く信仰していた主人公 David が，アメリカへ渡るや否や信仰から急速に離れていき世俗化した後，その空白を埋めるものとして新たに登場したものである。本題に入る前にまず，David がいかにして Judaism から離れ Socialism と Social Darwinism という別の二つの ism を選択したのか，その世俗化のプロセスを辿っておきたい。

1．David Levinsky の世俗化－Judaism から Secularism へ

The Rise of David Levinsky の Book 1 から 4 までは，David のロシア時代について書かれている。この部分では，非常に信心深くラビになることを目指していた母子家庭の貧しい少年が，次第にユダヤ教から離れていくプロセスが描かれている。それを促しているのは啓蒙の時代という新しい時代の波である。当初タルムード学徒である David は，「異教徒の大学で教えている高等数学もタルムードに比べれば，子供の遊びみたいなものだ」（28）と感じ，ラビ

も「神の言葉を勉強することは無上の喜びである」と David に説き世俗的文化に対するユダヤ教の優位性を認めている。しかしそのラビも，生活力の無さゆえに妻に軽蔑されている。町の金持ちの子弟は，ユダヤ教の宗教学校ではなく，ロシアの高校へ行き，異教徒の本で学び，イディッシュ語の代りにロシア語を日常語とし，結婚までは男女の同席すら許されない正統派のユダヤ人たちとは異なり，気軽に女の子をダンスに誘う。David はユダヤ教離れした若きユダヤ人たちを軽蔑しつつも心のどこかで羨みもする。そして更に母の死と貧困が彼のユダヤ教離れを加速させていく。神学生の中にも Naphtali のように無神論者を自認するものが出てくる。同化ユダヤ人で篤志家の Shiphrah Minsker 夫人から援助を受けて最悪の貧困を抜けると，David の頭の中には，当時の大多数の東欧系ユダヤ人同様，アメリカへの思いが入ってくる。歴史上も皇帝アレクサンダー2世の暗殺後，pogrom のような反ユダヤ的暴動が頻繁に起こるようになったが，迫害から逃れたいという消極的な意味だけでなく，「アメリカは，単に乳と蜜の国としてだけでなく，それ以上に，神秘，素晴らしき体験，驚くべき変化をもたらしてくれる国として私を惹きつけるのだ」(61) と David が語っているように，アメリカへの移民に，自分を変えるという積極的な意味を込めている事が伺えよう。当然のことながらラビは，「アメリカへ行けば異教徒になる」(61) と，反対するが，David の意思は固く彼のアメリカ行きは，Shiphrah Minsker 夫人の娘 Matilda の援助で実現する。

The Rise of David Levinsky の David の場合，ロシアにいる間に啓蒙主義やアメリカに対する憧れ，または反ユダヤ主義の脅威や貧困を神が救えぬという無力感からユダヤ教離れはおきているが，社会主義が彼の脳裏に入ってきたという痕跡は無い。一方，作者である Abraham Cahan 自身についてみれば，14歳の時にはやはりユダヤ教に対する関心が薄れており，ラビになるための学校である yeshiva まで辞めてしまっている。彼の場合には，ロシアにいた時分から急速に脱ユダヤ教化が進んでいたことを窺い知ることが出来る。そして翌年には禁じられていた社会主義のパンフレットを読み，社会主義の洗礼を受けているように，ユダヤ教が抜けた間隙をすぐさま，社会主義が埋めている。彼は更に１９歳になると急進論者の運動に参加するようになり，1881年に皇帝アレクサンダー２世が暗殺され，ポグロムが頻繁に起こるようになった翌年の過越祭の直後に，二度に渡ってロシア警察による部屋の捜索を受けたのを契機に，６月にはアメリカに渡っている。社会主義者に対する迫害を逃れるという点では消極的な理由かもしれないが，それ以上にアメリカに社会主義を広めるという明確な目的の下に移民したのである。Cahan の主人公，David はアメリカへ移民した後に，社会主義の洗礼を受ける。まずは，この小説の社会主義的側面について論じてみたいと思う。

２．社会主義

20世紀初頭のアメリカは西部開拓の夢も潰え，農村にも働く場を失った人々が，都市に押し

寄せ安い労働力となっていた。このため都市の労働環境は劣悪なものとなり，これを改善すべく労働組合が作られ，ストも頻繁に行われるようになり，社会主義的活動が盛んになる。この運動の一つの中心となったグループが，Cahan のようなロシアからのユダヤ系移民であった。既に述べたように Abraham Cahan 自身は，15歳で社会主義のパンフレットを読み，社会主義の洗礼を受け，その後社会主義革命運動に参加するようになり，活動家に対する迫害を逃れて，1882年に渡米，翌年には社会主義者の会合に出席しスピーチをし，27歳で正式に入党している。

その後の彼は，教師を経てジャーナリストの道を歩くことになる。彼は *Jewish Daily Forward* に代表される社会主義的な雑誌や新聞の編集者を歴任していく。その際，彼が選んだ言語は，彼が後にしてきた旧世界の言語であるロシア語でもなく，自由と希望を抱いて渡ってきた新世界の言語である英語でもなく，東欧のユダヤ人の日常語であるイディッシュ語であった。社会主義者として Cahan の目は，greenhorn と呼ばれる貧しいユダヤ人の新移民たちに向けられていた。彼らは英語が習得できず，旧世界の言語をアメリカでも引きずっていたのである。そのような彼らに訴えかけるためには，イディッシュ語で語りかける必要があったといえよう。Nathan Glazer は，*American Judaism* の中で，Cahan について，「彼は社会主義者ではあったが，アメリカを知る必要性を強調しており，アメリカでもロシアにいたときと同様に振る舞っている理論家たちを攻撃している。彼の興味の中心は社会主義それ自体ではなく，ユダヤ人の移民たちを現代的な市民に変えることであった」(68-69) と述べている。この指摘のように Cahan は社会主義者を自認してはいたが，主眼は社会主義においていなかった点や，彼自身ジャーナリズムの分野で成功を収め名士となり，もはや一介の労働者とはいえず，視点もそれに従ってむしろ資本家のそれに近づいたことなどが，*The Rise of David Levinsky* の主人公 David の描き方にも反映されているように思われる。

David は移民当初，搾取工場で職工として働いていた時，敗北感を味わうが，この時，「もし当時社会主義者の演説を聞く機会があったなら，私はカール・マルクスの熱烈な信奉者になり，私の人生は，私に経済力をもたらしてくれたのとは別の方向へ行っていたことだろう」(153) と社会主義者と成り得た可能性は示唆している。彼の店は安いユダヤ系新移民の労働力で成立していた。彼は社会主義を信じていたわけではないが組合に入らないと白眼視される風潮の中で，労働組合にも一応加入する。組合を恐れていたので，表向きは組合に加入したが，賃金も労働時間も守られておらず，それをイディッシュ語の社会主義系週刊誌 *Arbeiter Zeitung* に書き立てられると，怒りは感じるがそれと同時に自分の名が活字になり，ロスチャイルドのような大資本家と共に非難されていることに虚栄心を感じるのである。このようにアメリカでの David は，社会主義にも関心を寄せるが，自分で工場を持ち順調に成功していくに従ってむしろ資本家であることに誇りを見出し，逆に社会主義を敵視し貧しい労働者を非適応者と蔑むようになる。このためアメリカへの渡航費用を出してくれた恩人 Matilda から，

「資本家，ブルジョワ」呼ばわりされ軽蔑される。以上のことから David がユダヤ教に代わって信仰したものは社会主義というよりはむしろ，社会進化論であるように思われる。

3．社会進化論

The Rise of David Levinsky の主人公 David は1885年にアメリカへ渡っている。この南北戦争を経て19世紀も末に近づいた時代のアメリカを見ると，ある意味で華やかであった鍍金時代も終りかけ，フロンティアも消失していた。科学とテクノロジーの発展に支えられて産業は急激な発展を遂げていた。このような中で，19世紀半ばに唱えられた Darwin の進化論は，アメリカではむしろイギリス産業革命の申し子であり“the survival of the fittest”の考案者である Herbert Spencer 流の，純粋に生物学的な解釈を超えて，資本主義などに応用した理論としてもてはやされ，資本主義の枠組みの中で，生存競争が繰り広げられた結果，適者が生き残り金持ちとなって成功していくという成功の哲学として認められていく。*The Rise of David Levinsky* において進化論の影響が見られるのは，まずは David がユダヤ系の移民としてアメリカへ渡り，そこでアメリカ社会に適応すべく奮励努力し，上手く同化してアメリカ社会で適者として生き延びていくところであり，次にアメリカの資本主義社会の中で，衣料品業者として生存競争に勝ち抜いて成功し社会の梯子を伸上がっていく点にみられる。また，進化論は往々にして白人の，その他の人種に対する優位主義の根拠として用いられることもあるが，この作品の中では，WASP のユダヤ人に対する優位主義の他に，同じユダヤ人でもドイツ系ユダヤ人のロシア系ユダヤ人に対する，あるいはその逆の優位主義として書かれている。

a. David のアメリカ社会への適応—unfinished business

「David Levinsky の世俗化」の項で既に述べたように，ロシアにいた時分の David は，徐々にユダヤ教から心が離れていき，また周囲の同化ユダヤ人たちの文化的経済的生活レベルの高さに憧れながら，ロシア文化を受け入れ「異教徒のようにふるまう」ことには抵抗があり，当時の啓蒙主義の影響を受けたユダヤ知識人達とは異なり，ロシア文化への適応の努力は全くと言ってよいほどしていない。しかしアメリカへ渡るや否や，David は早急にアメリカ社会に同化していく。彼自身それを“the second birth”(86) と感じたように，彼のアメリカ文化受容による変化は劇的なものである。変化はまず外見から訪れる。その正統派ユダヤ人風の風采から新移民（greenhorn）呼ばわりされ，アメリカへ到着しても金も無ければ引受け手も無く途方にくれていた David に，同郷で彼の母の悲劇的死に同情を寄せた Even 氏が救いの手を差し伸べてくれる。彼は洋服から靴，ハンカチに至るまで，アメリカの衣服を整えてくれる。それから床屋へ連れて行き，一目でユダヤ人とわかる“side-locks”[3] を切らせ，見掛けは根っからのアメリカ人と変わらなくなる。このように外見的同化は，他者の手を借りて一気に完成し，その結果，「自分で自分がわからないほど変化」し，「ロシアや移民船に乗った日々が遠くに感

じられる」(101) と述べているように，過去の自分に別れを告げている。

これを手始めに David のアメリカへの同化の試みは，不断無く続く。まずは英語の習得である。多くの移民に共通して見られる言葉の壁を乗り越え，ユダヤ訛りを克服するために，彼は高い家賃を支払いながらわざわざ非ユダヤ人居住区にあるアイルランド系の家に下宿し，「アメリカ生まれの人が話す」(165) 英語に耳を傾け，その努力の甲斐あって英語は目に見えて向上する。それが達成すると元来タルムード学徒であった彼は，次に教育に強い関心を寄せ，“the Young Men's Hebrew Association”に本を借りるために通い，何とか大学教育を受けたいと望む。しかし彼の思いは既にユダヤ教からは離れてしまっているので，ユダヤ教の学問ではなく，恩人のマチルダが望んだように，医者か弁護士か，作家等知的分野での成功を考える。しかし学資の当てが無かったため，同じ工場の女工で少ない給料の中から必死の思いで結婚資金をためている Gussie の貯金目当てに彼女との結婚まで考えるが，愛が無いことを彼女に見破られ実現できない。大学の前を通る度に，「シナゴーグの前を通りすぎる改宗したユダヤ人のような気がした」(207) と無念な思いを表現している。

その結果彼は，ビジネスの世界で生きることになり，「アメリカの教育は安っぽい機械作りの産物」(167) とさげすんではみるが，教育に対する思いは成功した後も終生消えることが無く，偶然再会したニューヨーク市立大学を出て医者になった旧友を羨む。物語の終盤でも人生を振り返って，「科学者や作家になっていたら，もっとずっと幸福だったに違いない」(529) とか，「衣料業者よりも大学教授のほうがずっと成功し，幸福になれたろう」(529) と知的仕事に対する思いは強く，それが成就できなかったという挫折感は大きく，その意味では，“a victim of circumstances”(530) とまで，彼に言わしめている。

一見，衣料産業での成功者としてアメリカ社会に適応したかに見えても，様々な局面で David は，居心地の悪さを残している。例えば食文化である。ロシアにいた時には，ユダヤ人が食べることを許されたコーシャーフードしか口にせず，移民船にもそれを気遣って，食べ物を持たせられたほどであり，アメリカでは異教徒のレストランを贔屓にし，豚肉まで食べるユダヤ人がたくさんいることに驚いていた彼だが，成功するに従って，商談のためにも，異教徒を伴って異教徒が経営する格式の高いレストランに行くようになる。しかしここで彼は，テーブルマナーがわからず，「ニューイングランド出身の純血のアングロサクソン」の Eaton 氏に食器やナプキンの使い方を教わるはめになる。彼はその後正式なマナーも身につけ，服装も常に“a genteel American”のようにしようと，裕福なアメリカ商人の服装を見て真似るなど不断の努力を続け，寸分の隙も無いアメリカ紳士になったかのように見える。しかし物語の最後で，David は，次のように告白している。

> I don't seem to be able to get accustomed to my luxurious life. I am always more or less conscious of my good clothes, of the high quality of my office

furniture, of the power I wield over the men in my pay. As I have said in another connection, I still have a lurking fear of restaurant waiters. (530)

ここでは，社会進化論で言えば，奮励努力によって瞬く間にアメリカ社会で最適応者となり，生存競争を制覇したかにみえる David ではあるが，いまだにレストランのウェイターにテーブルマナーを笑われないだろうかと恐れ劣等感に苛まれているように，文化的側面では，未だに完全な適応者になっているとは言えないのである。

ｂ．資本主義社会における生存競争・適者生存

他人の好意にすがり渡航費用も出してもらった David は，ほとんど無一文であったばかりか何の伝もなくアメリカの地を踏むことになる。資本主義的見方をすればゼロ，すなわち進化の原点に立たされた彼は，まるで「ジャングルの只中に捨てられた人」(90) のように感じる。一緒に船旅をした Gitelson は仕立屋で技術があったために雇い主がすぐに見つかるが，「タルムードを読めます。」(91) と答えた David には仕事は与えられず，ユダヤ教の知識はアメリカでは何の価値も無いことを思い知らされる。

Even 氏にもらったお金を元手に，当時のユダヤ系移民たちが最初にした仕事である，“pushcart”での行商を始める。しかし慣れない商売は上手くいかず，同郷の売春婦に施しを受けるくらい落ちぶれる。仕立屋として成功していた Gitelson と再会した彼は，彼から機械のオペレーターになることを勧められる。生産ラインに組み込まれた David は，「無実なのに突然牢獄へ放り込まれ重労働を強いられたような気がした」(152) とあるように，朝の6時から夜の9時まで続く毎日の重労働に精神的にも肉体的にもショックを受ける。「行商をやってみたけれど失敗した。私は機械工としても失敗者なのだろうか？ 私は何をやっても不適格者なのだろうか？」(152) と嘆く彼は，文字通り進化論で言う敗者になりかけていた。だが，仕事にも慣れ創意工夫することを覚えると仕事そのものも楽しくまた，“Cloak-making was now nothing but a temporary round of dreary toil, an unavoidable stepping-stone to loftier occupations.”(167) という彼の言葉からは，これをステップに更に社会階層の中で上昇を志向する David の姿勢が明確に示されている。

その言葉通り次のステップとして単なる職工から職工を使う立場の“inside place”に職を得，更に自分の店を持とうと試みる。元手もなしに才覚だけで彼は500枚の衣服の注文をとるが材料を買うお金も無い。そこで信用貸しを利用しチェックで支払いをすることを覚える。ここで彼は，「人間は明瞭に二つのクラスに分けられる。支払いを現金で行う人とチェックで行う人である。」と自分がチェックを使用できる勝者の側に立つ様になったという優越感に浸る。代金の支払いがなされないという危機も乗り越えて，以後彼は安い労働力を使って「一級品を最安値で売る」(341) という評判をとり，以後彼が後に“my financial evolution”(372) と述べた，衣料業界トップを目指した社会的進化が始まる。

新移民のような組合に入っていない低賃金労働者を使って安く仕上げる資本家として組合と反目するようになっていた彼は，その頃から，Spencer の *Sociology* を愛読するようになる“'The able fellow succeed, and the misfits fail. Then the misfits begrudge those who accomplish things.' I almost felt as though Darwin and Spencer had plagiarized a discovery of mine.”（282）と述べているように，自分は社会進化論を地で行っているのであり，その中で当然自分は有能な“fittest”（283）であり，“A working-man, and every one else who was poor, was an object of contempt to me − a misfit, a weakling, a failure, one of the ruck.”（283）とあるように，貧しい一介の労働者たちを不適応の弱者として見下している。

その一方で，「なんとか生産コストを驚異的に低いレベルまで引き下げようと必死になっている衣料品生産者のマイノリティの一人に過ぎない」（346）と劣等意識を抱くなど心の揺れも見られることも確かである。しかし工場もブロードウェイに引っ越し本格的オフィスも構え成功した彼は人々から，「類まれな才能の持ち主，特別優れた人」（347）と賞賛される。すると，“I looked upon poor people with more contempt than ever. I still called them “misfits,” in a Darwinian sense.”（347）と彼の貧乏人に対する軽蔑は更に助長していくのである。

当然のことながら，彼は社会に上手く適応できなかった弱者たちの反感を買うことになる。かつてのライバルで今は落ち目の Loeb から，“Get-Rich-Quick Levinsky!”と呼ばれ，“decent”な商売をしていないと揶揄される。David は，“'Every misfit claims to be more decent than the fellow who gets the business.' . . . 'The fittest survives.'”（374）と切り返す。しかし精神的に成長した彼は，相手を罵倒しただけでは終りにせず，彼を部下として自分の会社に取り込むことに成功する。彼の事業の成功は「新しいものを数多く取り入れ，より完全なものになるよう進化させて」（374）いき，「アメリカのビジネスのやり方に順応させていった」（374）ことから達成されている。 このように社会進化論は，“The only thing I believed in was the cold, drab theory of the struggle for existence and the survival of the fittest.”（380）とあるように，ユダヤ教に取って代わった彼の信仰の対象ですらあったのである。

c. 優位主義思想としての進化論

ジョサイア・ストロング牧師やジョン・バレットらは，進化論を民族に応用し，アメリカ人はいかなる競争にも打ち勝って繁栄していく優秀な民族であるとして，アメリカ人の他民族に対する優位性を主張するようになる。そしてアメリカ国内においては，WASP をアメリカ社会における適者として，それ以外の黒人やユダヤ人等のマイノリティに対する優位性を主張する。この作品の中にもユダヤ人差別という形で，WASP のユダヤ人に対する優位性が描かれ

てはいるが，この作品ではむしろユダヤ人のグループ同士が互いに優位性を主張している点に主眼が置かれているように思われる。

ドイツ系ユダヤ人のロシア系ユダヤ人に対する優位性[4]

The Rise of David Levinsky には，ドイツ系ユダヤ人とロシア系ユダヤ人の確執がしばしば描かれている。実際，歴史的に見るとロシア系ユダヤ人たちが，ポグロムを逃れて1890年代に大量にアメリカへ移民してきたのに対して，ドイツ系ユダヤ人がアメリカへやって来たのは，それよりも50年早い西部開拓期にあたる1840年頃からであり，人数的にもロシア系に比べれば小数であった。

彼らの母国であるドイツは，当時啓蒙主義の時代であり，科学が大きな影響力を持つようになっていた。この西洋文明の主流に乗り遅れまいとして，ドイツのユダヤ人たちは，「脱ゲットー化」を図り，それと同時に，ユダヤ人・非ユダヤ人の双方に世界文明に対するユダヤ人の貢献をアピールすべく，Leopold Zunz（1794-1874）等の手によって，“The Science of Judaism”運動が行われるようになる。[5]

以上のような背景を背負いアメリカへ渡ったドイツ系ユダヤ人たちは，アメリカで更なる科学からの宗教攻撃に直面することになる。それは1859年に出版された，ダーウィンの『種の起源』の洗礼である。これによって聖書は，神によるこの世界と人間の創造段階から否定されることになった。アダムは神が土から創造したものでも，イブの肋骨から作ったものでもなく，猿と共通の祖先から進化したものになったのである。

19世紀半ばにアメリカへ渡ったドイツ系ユダヤ人であるラビの Isaac M. Wise は，当時の宗教よりも科学が信仰され，テクノロジーが万能視される風潮の中で，科学の脅威に拮抗するために，アメリカニズムをユダヤ教に導入することを考える。それはプラグマティズムの考え方を取り入れたものであり，およそそれまでのユダヤ教会では考えられない改革を成し遂げている。[6] この結果として女性のラビも誕生する。このようにユダヤ教を積極的にアメリカナイズしたことで，正統派ユダヤ教本来の純粋さは失われたかもしれないが，ドイツ系ユダヤ人たちは，ユダヤ教を保持することが出来たのである。

以上のように宗教的にも啓蒙主義の影響を受け，アメリカ社会への同化を果たしたドイツ系ユダヤ人は，その多くがアメリカのフロンティアで活躍することになる。彼らは，鉄鋼，石油，鉄道，石炭，科学といった WASP が成功を収めた分野にこそ入り込むことはできなかったが，金融と小売業の分野で成功を収め，旧世界では夢にも考えられなかった富を得て，ドイツ系ユダヤ人のエリート層を形成していき，とりわけ彼らの活躍は，急速に発展しつつあった衣料産業の分野で顕著であった。[7]

ドイツ系ユダヤ人に50年遅れて1890年代にアメリカにやってきたロシア系ユダヤ人の場合，

西漸運動はすでに終わり，フロンティアも消失し，代わって都市が経済的発展を遂げ始めた時代である。彼らは辺境の商人になる代りに，都市に住み行商人や労働者になった。この時期ドイツ系ユダヤ人は既にアメリカ社会への同化を果たし，社会的成功も収めていた。彼らにとって中世さながらの風采をした貧しいロシア系ユダヤ人は，同情の対象というよりはむしろ，目障りで軽蔑の対象であった。しかしユダヤ人としての自らの体面を保ちたい故に，ロシア系移民に援助の手を差し伸べるのである。このようにこの時期は完全にドイツ系ユダヤ人が，ロシア系ユダヤ移民に対して優位の立場にあった。

The Rise of David Levinsky でも，ドイツ系ユダヤ人が衣料産業を牛耳っていた歴史的事実とも照合するように，David はまずドイツ系ユダヤ人である Manheimer 氏が経営する工場で雇われる。ここでロシア系である彼は，Manheimer 一族の一人から，「劣った人種」(187) のような扱いを受け，「マナーの欠如をしばしば指摘」(187) される。たとえば David は仕事の合間に昼食をとろうとしてミルクをこぼしてしまうが，折悪しくそれを見咎められ，「君はどこで育ったのかい? インディアンのところかい？」(188) と嘲笑される。これが契機となって David は同じくロシア系ユダヤ人で才能がありながら不遇の Chaikin と事業を起こすことを思いつくのである。しかしサンプルをデパートに持ち込んでもロシア系ユダヤ人というだけで相手にされない。後進のロシア系にとってドイツ系の壁は大きく，中小の小売業者から売り込んでいかねばならないのである。しかしここからドイツ系に対するロシア系ユダヤ人の猛追が始まる。

ロシア系ユダヤ人のドイツ系ユダヤ人に対する優位性

苦労しながらも衣料産業の分野で，ドイツ系ユダヤ人の牙城に食い込もうと努力する David であるが，既に彼の脳裏には，ロシア系ユダヤ人がドイツ系に追いつき更に抜いていく光景が浮かんでいる。確かに，「ドイツ系の商人たちはアメリカにおける衣料産業のパイオニア」であり，「商業では優れて」(201) いることを認めたうえで，1870年代にはドイツ系が中心であった衣料産業であるが，1880年代から90年代にかけて多量にアメリカへやって来たロシア系ユダヤ移民が，労働力としてその発展に寄与し，主権をロシア系が握るようになったと見ている。

> The time I speak of, the late '80's and the early '90's, is connected with an important and interesting chapter in the history of the American cloak business. Hitherto in the control of German Jews, it was now beginning to pass into the hands of their Russian co-religionists, the change being effected under peculiar conditions that were destined to lead to a stupendous development of the industry. (201)

アメリカでは70年代までは婦人服やジャケットといったファッションにはさして興味は持たれず，一部の需要を満たすためにドイツから輸入されていた位であった。それが80年代に入る

と衣料産業に多額の資本が投下されるようになり，それと共に“a hard struggle”であるにせよ新参者の移民の仕立屋にもビジネスチャンスが開かれるようになる。David が事業を起こそうとしたのは，ちょうどこの過渡期であった。David はこの転換を，ドイツ系が「単なる商人」(374) であったのに対して，ロシア系は，「衣料産業の機械的要素を学んだ仕立屋や，衣料品製造機器のオペレーター」(374) であり，「衣料産業をより完全なものへと大変革するために多くの創意工夫を取り入れた功労者」(374) であると分析している。その結果，これまで手作業でしか出来なかった衣類が機械で作られるようになり，価格が大幅に下がり，一般大衆でも気楽に洋服を買うことが出来るようになった。だから元々「外国人で英語もろくに話せなかったロシア系」(443) こそが，アメリカ女性を「世界のベストドレッサー」(444) にしたと豪語するのである。ここでは，ロシア系ユダヤ人が，衣料産業の分野で，ドイツ系ユダヤ人をついに抜き優位な立場を獲得したばかりか，アメリカの発展に寄与しているという David の自負が感じられる。

４．再びユダヤ教へ

宗教的に見て興味深いのは，啓蒙運動の結果，ドイツ系ユダヤ人は，改革派になったのに対して，東欧系のユダヤ人の場合には，ユダヤ教が，socialism や anarchism，Zionism といった様々な ism の信奉に取って代わった点である。*American Judaism* の著者である Nathan Glazer は，ドイツ系ユダヤ人と違って，東欧のゲットーには，啓蒙運動の波は押し寄せにくく，ユダヤ教が純粋に保たれていたために，宗教改革など思いもよらなかった。この為アメリカへ移民したあと，ドイツ系ユダヤ人とは異なり，いきなり改革不可能なユダヤ教を捨てて，社会主義に走るという極端な形をとることになった経緯を述べている。

ドイツ系ユダヤ人の例をみてもわかるように，ロシア系ユダヤ人も改革の道をとれば，科学や宗教やアメリカニズムを同時に信じることが可能であったのに，東欧のシュテットルやロシアのペイルといった中世さながらの純粋なユダヤ人世界から急にアメリカのテクノロジー万能の時代に放り込まれた彼らは，あまりの違いに適応できず，ユダヤ教そのものを捨てることになったのだ。

The Rise of David Levinsky においても，ロシアに居た時からユダヤ教離れが始まっていた David の心は，アメリカに着くや否やユダヤ教から離れていき，自ら“free thinker”を自認するようになる。彼にとってユダヤ教の神にとって代わったのが，スペンサーやダーウィンの唱えた進化論であった。確かにビジネスの世界では進化論の，「生存競争」と「適者生存」の原理が神であった。

しかしユダヤ人が大多数を占める衣料産業で更に成功するためには，彼らの信頼を得るためにユダヤ教会に通い戒律をある程度守ることも必要であり，世間的信用を得るためには，裕福

なユダヤ人の娘と結婚することも必要不可欠であるとDavidは考える。このため彼は，この条件にあう同郷のKaplan氏の娘Fannyと婚約し，もはや信仰心は失せてしまっているものの，氏に言われるままにユダヤ教徒としてふさわしい行動をとろうとする。無心論者になり進化論を信奉し，ただでさえ父母の命日にしか訪れないなどシナゴーグから全く遠ざかっていたDavidだったが，敬虔なユダヤ人家庭の娘と婚約したことで再びシナゴーグへ足を運ぶようになる。

> In former years, even some time after I had become a convinced free-thinker, I had visited it (Antomir Synagogue) at least twice a year – on my two memorial days – that is, on the anniversaries of the death of my parents. I had not done so since I had read Spencer. This time, however, the anniversary of my mother's death had a peculiar meaning for me. Vaguely as a result of my new mood, and distinctly as a result of my betrothal, I was lured to the synagogue by a force against which my Spencerian agnosticism was powerless. (388)

引用からは更にDavidの心の中にスペンサーの不可知論を以ってしても抗うことが出来ないユダヤ教への誘いが再び芽生えていることを伺い知ることができる。義父になる予定のKaplan氏は，自分よりも先にユダヤ教会に来て祈りをささげていた娘の婚約者を誉め，「ユダヤ教の道に従えば，全てが上手くいく」(390) と諭すのである。このようにDavidとユダヤ教とのかかわりは，結婚や事業の拡大といった打算的で形式的な要素もあるが，少なくとも彼が一度捨て去った宗教を再び意識している点は確かである。

しかしDavidが回帰したかに見えるこのユダヤ教会も，彼の目には，何もかも新しすぎてぴかぴかでけばけばしく，ロシアにあったシナゴーグよりもアメリカの改革派のユダヤ教会を想起させる。しかもこの建物は最近までキリスト教会であったという事実まで添えてある。このように彼とユダヤ教はアンビヴァレントな関係であり，宗教への反発と回帰が繰り返されていくが，それは彼の女性関係に象徴的に示されているように思われる。

Davidのユダヤ教回帰の契機となったFannyとの結婚は，彼女に対する愛が無かったことと，魅力的で社会主義を信奉する世俗的な女性Annaに心を移したことから破談になる。彼女への愛ゆえに社会主義者の団体に寄付をしたり，不動産業を営む父親に言われるままに投資をしたりして，彼なりに彼女に尽くそうとするが，結局Annaにとって彼は“money-bag”にすぎず，求婚を拒まれてしまう。この辺の経緯からは，Davidがユダヤ教から再び，socialismという別のismへ心変わりしたことが伺える。しかし最終的にはAnnaに結婚を拒まれたように，彼の社会主義に対する態度は曖昧で彼は多くの場合，むしろ資本家であることを選んでいるように見える。その後，彼の前に現れる女性たちは皆，彼の財産が目当てで結婚には

至らない。一度異教徒の未亡人を深く愛するようになるが，ユダヤ教が禁じている異教徒との結婚にはどうしても踏み切れない。この点にも自由思想家を自称しながら，心の奥底でユダヤ教の頚木に縛られている彼の真相が見え隠れする。

孤独な彼の思いは，同郷の人との語らいや Antomir の思い出へと向けられる。Levinsky Antomir Benefit Society を作り，同郷者をアメリカへ呼び寄せ自分の工場で働かせ，故郷の雰囲気を醸しだそうと努力する。ここでも故郷と深く結びついているものはユダヤ教である。物語の最後で David は，それまでの人生を振り返って，“David, the poor lad swinging over a Talmud volume at the Preacher's Synagogue, seems to have more in common with my inner identity than David Levinsky, the well-known cloak-manufacturer.”（530）と，心中を吐露する。結婚も出来ず孤独で，心の寄る辺とすべきユダヤ教から離れてしまった自分は，一見成功者のように見えながら実は，「環境の犠牲者」（528）であり，本来自分が居るべき場所は，実は後にしてきたロシアのユダヤ世界であるのではないかとの思いを拭い去ることが出来ない。

この David のユダヤ教を深く信仰していた過去・故郷といういわば原点へ回帰したいという思いは，進化論に当てはめて考えてみるなら，進化以前の世界への回帰願望とも捉えることが出来るだろう。　ダーウィンの進化論に深い影響を受けた Jack London は，*Call of the Wild*（1903）を著したが，主人公である犬のバックは，飼い主の愛情を受けながらの安穏とした暮らしから一転して，冷酷な新しい飼い主の下で，アラスカで犬橇をひく過酷な生活へと一変するが，彼の優れた特質ゆえに，厳しい生存競争の中を適者として生き残っていく。彼は最後には狼という自分の先祖の世界に返り，狼たちの長になったことが示唆されている。ここでは，先祖帰りという進化の原点への回帰が描かれているのである。

The Rise of David Levinsky が書かれたのは1917年であったが，大衆文学の世界では，翌年，Tarzan という映画がスコット・シドニー監督，エルモ・リンカン主演の下，封切られる。この原作は，1914年に Edgar Rice Barroughs によって出版されている。[8] 男性俳優の肉体美だけでなく，原始的な世界で自然の英知をもって自然界に君臨し，獣たちの王になるという原初の世界設定に当時だけでなく今に至るまで，人々は憧憬や賞賛の念を抱くのだ。

このように進化論がもて映やされ突き詰められた時，逆に進化以前の世界への憧憬が生じてくる。*The Rise of David Levinsky* の David の場合も，自然界ではないが，ビジネス界で進化を極めた果てに，彼が一度は捨て去った彼にとっては現初的世界といえる東欧のユダヤ世界あるいはユダヤ教への回帰願望が生じてきたのである。

注

1　Leslie A Fiedler, *To the Gentiles,* (New York：Stein and Day, 1972) p.76.

2　この作品について，文学とテクノロジーという観点では既に，拙著「エイブラハム・カーハンとテクノロジー」森田孟・鷲津浩子編『アメリカ文学とテクノロジー』2002年の中で論じている。

3　鬢を切らずにのばしたもの。earlock ともいう。

4　旧大陸からのユダヤ移民は，大きく分けて Sephardim と Ashkenazim の2つに分けられる。前者はスペイン・ポルトガルを中心とする南欧系のユダヤ人であり，自由の女神の台座に刻まれた詩で有名な Emma Lazarus のように，かなり早い段階でアメリカに移民し，同化が進んでいたグループである。後者は，ドイツから東欧・ロシアにかけての Yiddish 語を話す地域のユダヤ人で，通常ドイツ系ユダヤ人と東欧・ロシア系のユダヤ人に分けて考えられる。

5　この運動には，後にキリスト教に改宗した Heinrich　Heine も参加している。

6　例えば，シナゴーグが遠い場合や勤務の都合で土曜日にシナゴーグへ行けない場合には，その代りに，最寄のキリスト教会へ行き，そこで目を閉じて神に祈りをささげること（この場合の神は，もちろんキリストではなくユダヤの神であるが）を許したり，シナゴーグへ乗り物を利用していくことを許可するなど。

7　例えば，デニムの Levis，美術館で有名な Guggenhaim や Jacob H. Schiff，メイシーデパートの The Strans' Family 等が，例として挙げられる。

8　ターザンは，元来英国貴族の子供であったが，不運にも両親が死亡した後，類人猿に拾われ育てられる。彼は元来人間という優れた特質を持っているため，やがて密林の王者となる。猿として育った彼もやがて人間と遭遇し女性に恋をしていく。ターザンは非常に当時の人々にもてはやされ，シリーズ化されていく。もっとも有名なのは，1932年の，*Tarzan, The Ape Man* という W.S.Van Dyke II 監督，Johnny Weissmuller 主演による映画であろう。最近では，1999年にディズニー・アニメ化もされている。

参考文献

Cahan, Abraham. *The Rise of David Levinsky*. 1917. New York: Harper & Row, Publishers, 1960.

----. *Yekl and the Imported Bridegroom and Other Stories*. 1896. New York: Dover Publishers, Inc. 1970.

Degler, Carl N. *In Search of Human Nature: The Decline and Revival of Darwinism in American Social Thought*. Oxford: Oxford University Press, 1991.

Dimont, Max. I. *The Jews in America: The Roots, History, and Destiny of American Jews*. New York: Simon & Schuster, 1978.

Engel David. "The 'Discrepancies' of the Modern: Towards a Revaluation of Abraham Cahan's The Rise of David Levinsky" *Studies in American Jewsih Literature 2*. Ed. Daniel Walden. Albany: State University of New York Press, 1982.

Fiedler, Leslie A. *To the Gentiles*. New York: Stein and Day, Publishers, 1972.

Glazer, Nathan. *American Judaism*. 1957. Chicago: The University of Chicago Press, 1972.

Hapgood, Hutchins. *The Spirit of the Ghetto*. New York: Schocken Books, 1976.

Henkin, Leo J. *Darwinism in the English Novel 1860-1910*. New York: Russell & Russell, 1963.

Howells, William Dean. *The Rise of Silas Lapham*. 1885. Penguin Books Ltd, 1986.

Marovitz, Sanford E. *Abraham Cahan*. Twaine's United States Authors Series. New York: Twaine

publishers, 1996.

Marx, Leo. *The Machine in the Garden: Technology and the Pastoral Ideal in America*. London: Oxford University Press, 1964.

Pinsker, Sanford. *Jewish American Fiction 1917-1987*. Twaine's United States Authors Series. New York: Twaine publishers, 1992.

Pressman, Richard S. "Abraham Cahan, Capitalist; David Levinsky, Socialist" *The Changing Mosaic: From Chan to Malamud, Roth and Ozick Studies in American Jewish Literature*. Ed. Daniel Walden. Studies in American Jewish Literature Inc. 1993.

Wilkins, Walter J. *Science and Religious Thought: A Darwinism Case Study*. Michigan: UMI Research Press, 1987.

岩元巌　『シオドア=ドライサー』清水書院　2002年

ギテルマン，ツヴィ著　池田智訳　『葛藤の一世紀――ロシア・ユダヤ人の運命』サイマル出版　1997年

サイファー，ウィリー著　野島秀勝訳　『文学とテクノロジー』研究社　1972年

トバック E.他　本吉良治・岡本和子訳　『科学の名による差別と偏見』新曜社　1982年

ホフスタター，リチャード著　後藤昭次訳　『アメリカの社会進化思想』研究社　1973年